

## 第 3 章 基本理念と施策の展開

### 第 1 節 基本理念と 10 年後の住生活の展望

#### ① 基本理念

丹波市では、「第 2 次丹波市総合計画」のもと、市民がそれぞれのライフスタイルやライフステージに応じた豊かな生活を享受できる社会の構築に向け、市民や民間事業者、行政など様々な主体の「参画と協働」により、総合計画で掲げられたまちづくりの目標である「誰もが住みたい定住のまち」を実現するための、住生活の基本理念を次のように定めます。

第 2 次丹波市総合計画

まちづくりの目標：誰もが住みたい定住のまち

施策目標：丹（まごころ）の里に住みたい快適で安全な住環境をつくろう

#### <住生活の基本理念>

**丹（まごころ）の里に住みたい快適で安全な住環境をつくる**

「第 1 章 計画策定の趣旨」の記述にもあるように、この住生活基本計画の策定の目的は、今後の住生活に関する施策を丹波市の最重要課題である人口減少克服に向けた様々な施策と整合、連携を図りながら進めるために、中長期的な対応策を取りまとめることです。また、それによって実現する具体的な将来像は、「人口減少に歯止めがかかり、高い地域の自治機能を背景に、住み慣れた地域で、多様な住まい方をしながら、一人ひとりが力を発揮し、活躍する暮らし方（10 年後の住生活の展望）」を実現することです。そうした将来像は、第 2 次丹波市総合計画で示している「丹（まごころ）の里に住みたい快適で安全な住環境をつくろう」が目指す方向と同じものです。

そのため、この住生活基本計画における基本理念も、第 2 次丹波市総合計画で示している「丹（まごころ）の里に住みたい快適で安全な住環境をつくる」とし、これらの計画と整合を図ることとします。

この基本理念で示されている住生活を実現するためには、個性と能力を発揮しながら活躍する人を増やす必要があります。また、一方で、そうした住生活の実現に向けて取り組むことで、人口減少に歯止めがかかり、活躍人口も増えます。このように目指すべき住生活の実現と人口減少対策、活躍人口増加対策は相互に密接に関連しており、これらを一体的に推進していく必要があります。

**② 10年後の住生活の展望**

この住生活基本計画に記載されている施策を推進することで、10年後にどのような住生活が実現するのか、その具体的な姿を展望として次に示します。また、この展望を共有し、実現に向けて市民、事業者、地域、市などがそれぞれ役割や責任を自覚し、互いに協力・連携することが重要です。

**《 人口減少克服に明るい兆しが見えてきました 》**

- ・2010年の合計特殊出生率は1.66でしたが、2025年には1.91まで上昇し、地域のいたるところで子どもの泣き声、笑い声が聞こえてきます。
- ・2010年ごろまでは年間300人から400人の転出超過でしたが、今では転出の超過はなくなりました。若者の流出が止まり、あるいは一度丹波市を離れた若者が戻ってくるなど、まちに活気が戻ってきました。

**《 長年住み慣れた地域で住み続けています 》**

- ・10年前の人口ビジョンでは、このまま人口が減少し、住み慣れた地域で住み続けることは難しいのではと心配しましたが、今では地域に多くの若者も住み、あらゆる世代の市民が住み慣れた地域で住み続けることに希望を持てるようになりました。

**《 自治機能が以前にもまして高まってきました 》**

- ・もともと丹波市は自治基本条例の制定や地域づくり交付金などにより地域の自治機能は高かったですが、この10年間でさらに自治機能は高まり、地域の課題は地域で解決する機運が盛り上がっています。
- ・自治機能の高まりに加えて、市民プラザの設置などにより、様々な専門性の高いNPOなど市民活動団体の活動が活発に展開され、多様なサービスが提供されるようになりました。
- ・健康・医療・福祉の連携した民間の多様なサービスが住み慣れた地域で受けることが可能となる地域包括ケアシステムが確立されました。
- ・自治協議会の自治機能の高まり、専門性の高いNPO等の活動の出現、地域包括ケアシステムの充実などにより、多様なサービスの提供や行政以外での地域課題の解決が可能になり、住み慣れた地域で住み続けることが可能になりました。

**《 様々な産業で若者が活躍し、多様な住まい方をしています 》**

- ・多くの兼業農家が高齢化、後継者不足により将来を心配していましたが、この 10 年間で若い世代にバトンを渡せる農家が増え、ようやく農地の集約化、規模拡大を進める下地が整い始めました。多くの若い世代の農業従事者が農地の近くに住み、多自然居住を楽しみながら、昔ながらの丹波の原風景を守っています。
- ・丹波市は自分のやりたいことに挑戦できるまちというイメージが定着し、丹波市で生まれ育った多くの若者が丹波市でスモールビジネスの起業をしています。また、起業するために I ターンする若者が増えています。
- ・男女共同参画センターが開設され、女性の起業家が増えています。また、テレワークや子育てを応援する企業が増えて、女性が多様な働き方をしています。
- ・若い農業従事者への世代交代、都市部でなくても可能なスモールビジネスの起業、女性のより一層の社会での活躍など若者や女性の多様な働き方が、多自然居住、二地域居住、多世代同居・近居など多様な住まい方を広げつつあります。

**《 空き家が有効に活用されています 》**

- ・10 年前、市内各地に放置された危険な空き家が見受けられましたが、危険空き家に対する市民や自治会等の地道な努力と危険空き家の発生未然防止の仕組みにより、いまでは増加が抑制されています。
- ・10 年前、空き家は『やっかいなもの』でしたが、今では適切な情報提供とマッチングの仕組みにより、U I ターン者を呼び込む貴重な地域資源として活用され、丹波の田舎らしい風景を構成する要因にもなっています。

**《 どこでも安心して住めるようになりました 》**

- ・耐震改修支援により地震等災害に強い住宅が 10 年前に比べて増えるとともに、フェニックス共済への加入も 2014 年 8 月の豪雨災害を契機に 15%まで増えるなど安全安心な住宅が増えました。
- ・適正な行財政への見直しに伴い、一部の公共施設の集約や公共サービスの見直し、さらには市中心部での開発意欲の高まりによる商業施設の偏在は見られますが、こうしたサービス等を居住地に関係なく享受できるよう、10 年前に比べて公共交通網が充実されています。
- ・新たな市営住宅は建設されていませんが、長寿命化の改修や設備の改修等の質的向上が図られ、住宅困窮者には確実に住宅が提供されるセーフティネットとしての役割が果たされています。
- ・高齢者や障がい者が安心して暮らせるよう、グループホームやコレクティブハウジングなど多様な住宅が供給される支援策が整っています。